

島根大学研修報告

「出雲市における特別支援教育（幼児教育）の推進のために ～出雲の子どもたちの健やかな成長をめざして私たちにできること～」

I. 出雲市における就学前の特別支援教育の現状と課題

1. 出雲市に生まれた子どもの母親へのインタビュー

(1) 告知のあり方がその後の母親の思いを左右する

子どもの障がい被告知られた時、母親はショックを受けるが、告げる医師の対応で受け止めは全く違っていた。では安心感、安堵感をもち、前向きな姿勢で子育てに向かっていけるような告知はどうあればいいのだろうか。ある総合病院の医師は「告知は医師だけでなく、チームで行う必要性」を言ってくださっている。告知の場で複数のサポートが受けられるシステムは、きっと親が心の負担を軽減し、次へ進む一歩を後押しする力になるに違いない。

例えば

[スタッフ]担当医師、看護師、関係科の医師（小児科、リハ科など）、ソーシャルワーカー、臨床心理士、PT、OT、ST、患者地元の医師や保健師などから、最適と考える人たちがチームとなる。

[内容]障がいについての説明、今後の医療についての見通し、入院中・退院後の生活の助言、福祉サービスの利用の説明、将来の子どもの育ちの見通し、療育機関などへのつなぎ、保護者の気持ちが安定するための支援など

(2) ふつうにあたり前の子育てをするのに想像以上のエネルギーがいる

誤解を怖れずに言うと、ここで言う“ふつう”とは、普段の生活で特に意識したり、苦勞したりすることなくあたり前にやっている子育てのことである。インタビューをした子どもたちは就園の時も、障がいがあるという理由で入園を渋られたりしており、その時の親の心の負担はとても大きかったものと思われる。

障がいがある子を育てるのにエネルギーを使い、疲れ果ててしまう親の負担を少しでも軽くするためには、そのエネルギーを肩代わりしてくれる存在が必要である。行政の中にコーディネートできるシステムが望まれる。

(3) 子育てに困った時に、どこに相談していいかわからない

情報が多すぎて、そこから適切なものを選択して利用することが難しいという意見もあり、「困った時にはここに聞けばいい」という窓口の一本化を望んでいる。その窓口に乗れば、情報を提供してもらえたり、人や機関につないでもらえたり、助言がもらえたりする機関が必要であり、そのためには保健、福祉、教育に携わる立場の人たちがチームを作って対応することが必要である。

(4) 障がいのある子も障がいのない子も一緒に生活していくために

「入園させてよかった」「大きな育ちを感じることができた」と集団の生活での我が子の成長に喜びを感じている。障がいのある子どもを受け入れる園の姿勢や職員の保育観、専門性が大きく影響することは言うまでもなく、保育者は研修などで研鑽を積んでいかななくてはならない。また「多様な学びの場」として、保護者のニーズを踏まえると、特別支援教育の拠点園、通級指導教室の拡充が重要な支援策の一つである。

2. 幼稚園、保育所職員への特別支援教育に関するアンケートから

(1) 調査対象、回答数

- ・ 出雲市内 幼稚園 31園（公立 29園、私立 2園）
保育所 53園（公立 4園、私立 49園）
- ・ 上記に所属する職員のうち、園（所）長、教頭、主任、学級担任、養護教諭、看護師、支援員、通級指導教室担当者を対象とする。
- ・ 総数 1069人（幼稚園 199人、保育所 870人）

(2) アンケート内容

- ①フェイスシート ②特別支援教育に関する悩みと内容 ③特別支援教育の意識 ④研修について ⑤関係機関とのつながり ⑥必要と思われる行政や社会資源などのサポート ⑦自由記述

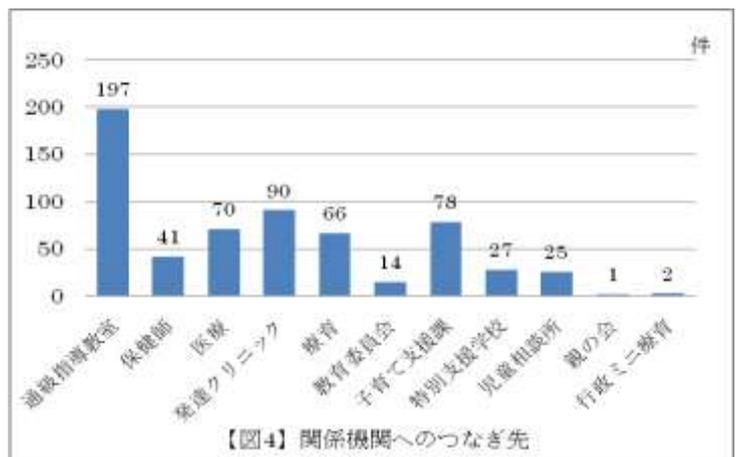
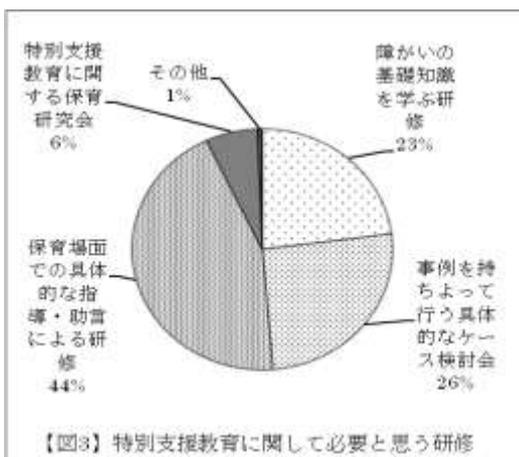
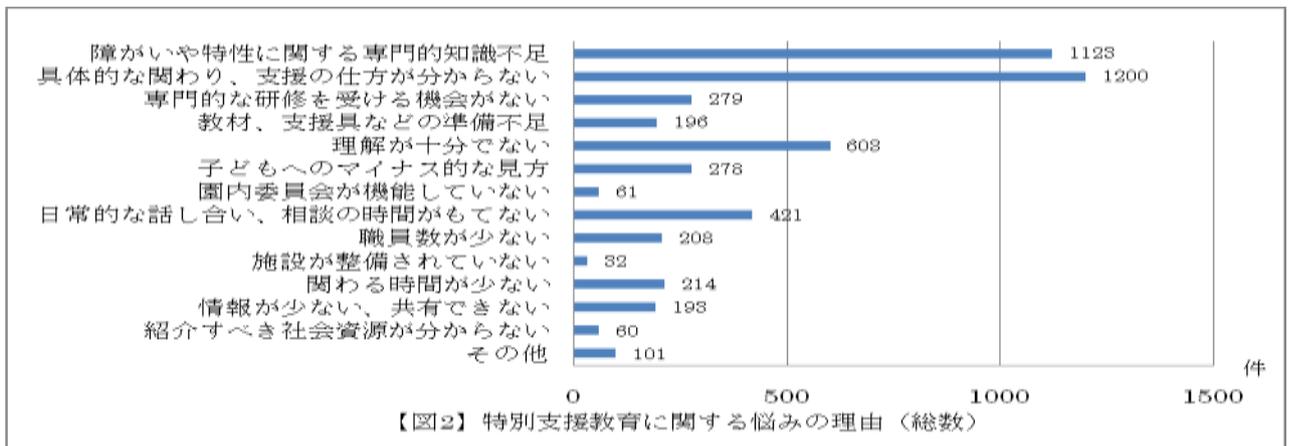
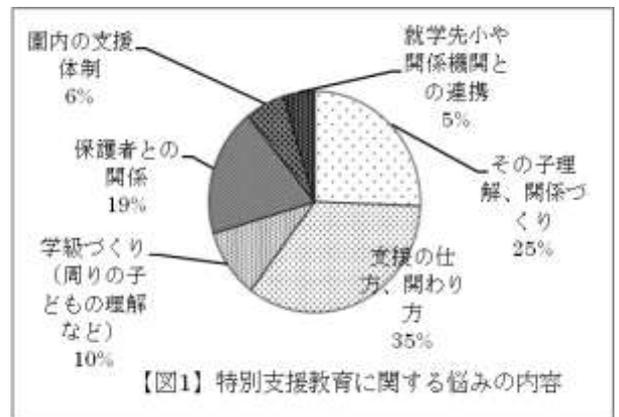
(3) 結果と考察

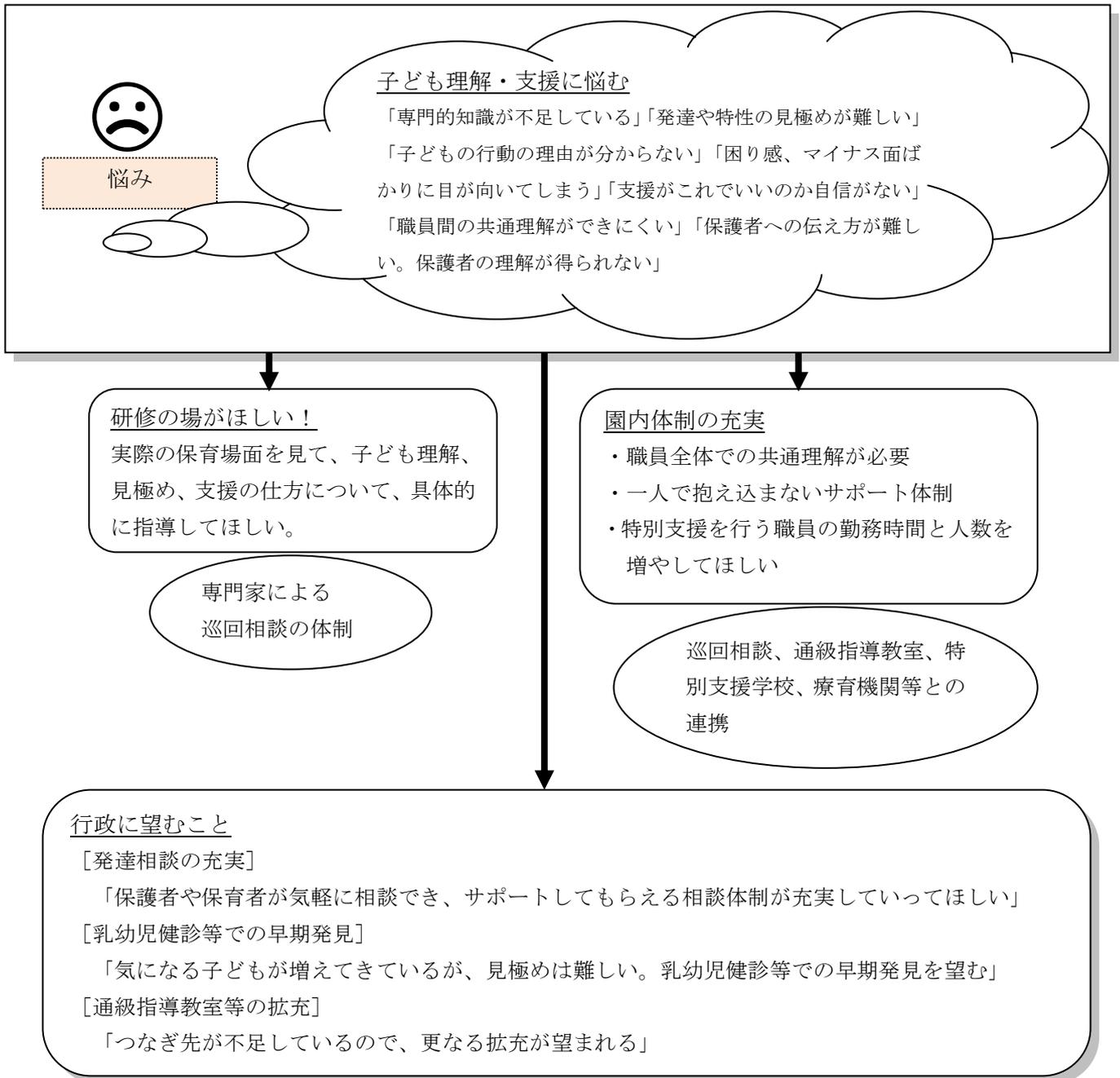
以下は主な結果のグラフデータとまとめを図で表したものである。

- ・ 特別支援教育に関する悩みで（選択回答）、最も多かったのが子ども理解、支援（[その子理解、関係づくり] [支援の仕方、関わり方]）であった（図1）。悩みの生じる理由としては[専門的知識の不足。支援の仕方が分からない]が最も多くあがっている（図2）。

- ・ 悩みを解消するために求める研修としては[保育場面での具体的な指導・助言による研修]が最も多く、子どもの姿を見て、より具体的で適切な指導、助言を求めていることが分かる。またそれが保育者の安心感、自信につながっていると思われる（図3）。

- ・ 特別な支援が必要だと思われる子どもを関係機関につないだことがあるか尋ねたところ「通級指導教室」が群を抜いて多く、つながりやすい場であることが分かる（図4）。





II. 今後の出雲市における特別支援教育のあり方について

1. 乳幼児期からの一貫した支援システムについて

(1) 窓口の一本化と事業運営の共同化

「ここに聞きさえすれば必要などころにつないでもらえる」という窓口の一本化と、保健、福祉、教育などの事業が、情報を共有し、連携協力して事業を運営していくことで、一人一人の子どもについて一貫性のある支援を行っていけると思われる。

(2) 相談と支援のコーディネートとコンサルテーション

保護者、幼稚園・保育所、小学校、各事業などを適切につなげていく役割が必要である。また単に連絡調整役で終わるのではなく、相談や支援に対して助言や提案をしていけるコンサルテーションの役目も重要である。必要によっては保健師、幼稚園教諭、保育士、小中学校教諭、通級指導教室担当者、臨床心理士、学識経験者、行政担当者等の適切な人たちでチームをつくって、対応していくことも考えられる。

(3) 特別支援教育のセンター的機能を有する園の設置・拡充

特別な支援を必要とする子どもを受け入れられる体制の整った特別支援の拠点園を増やす必要がある。そこには専門性を有する職員の養成、配置が必要である。また特別支援教育に関する相談窓口や未就園児が親子で通所する発達支援教室を設けて、「保護者や幼稚園・保育所への特別支援教育等に関する相談・情報提供」を行ったり、定期的な保育公開や事例検討会など「幼稚園・保育所職員に対する研修機能」を設けたりなどセンター的機能を有して充実に努めることも必要である。

(4) 発達支援教室・通級指導教室の拡充

発達が気になる子どもや心配のある保護者をつなげる機関が少ない現状がある。療育機関へつなげるまでではないが、支援が必要なケースの場合、親子で通える発達支援教室や通級指導教室のような場の拡充が不可欠である。

発達支援教室については平田・大社・斐川地域における「たんぼぼ教室」「ミルキーポップ」「おもちゃの家」の地域に根付いた、地域密着の取り組みが参考になる。

通級指導教室については、保育者へのアンケートで、特別な支援が必要と思われる子どもをつなぐ先として考える意見が圧倒的に多く、発達が気になる子どもをつなぎやすい場となっている。現在今市幼稚園内に幼児通級教室が設置され、4つの小学校通級に幼児担当が配置されているが、年々相談や指導件数が増えて、十分な対応が難しくなっている。今後は幼稚園内に設置された幼児通級指導教室の増設、幼稚園正規職員の通級指導教室担当を増やすことによる支援の量と質の向上、小学校通級指導教室に配置されている幼児担当者の勤務時間の延長（フルタイム勤務）、保護者や職員の相談や研修などを適切に実施できる機能の向上が望まれる。

2. 保育者の資質向上と園内体制の充実

(1) 研修の充実

保育者が抱えている悩みを解決し、資質向上していくためには研修は不可欠である。

研修プランについて、研修内容、役職・担当などの立場別、形式的スタイルという観点から具体化してみた。

研修内容

- ・子ども理解についての研修
- ・障がい特性理解についての研修
- ・保育場面での具体的な指導、助言による研修
- ・情報交換会
- ・保護者支援・保護者の思いを知る研修
- ・関係機関との連携を図るための研修
- ・通級指導教室担当者、巡回相談チームスタッフの専門性を高める研修

役職・担当などの立場別

	担任	特別な支援を行う 担当者	管理職	特別支援教育 コーディネータ	養護教諭・看護師
研修 の 目 的	一人一人の子ども理解と、集団の中でその子を生かしていく学級づくりを学ぶために	担当する子どもの発達や障がいの理解、支援のあり方について学ぶために	園内体制を整えていくリーダーシップを発揮するために	保護者、園内、関係機関との連携協力が円滑に図れるようにするために	障がいの理解、医療面からのフォロー、保護者支援をしていくために

	担任	特別な支援を行う 担当者	管理職	特別支援教育 コーディネータ	養護教諭・看護師
研 修 の 内 容	<div style="border: 1px dashed black; padding: 2px;"> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの発達、障がい特性について学ぶ研修 </div>				
	<div style="border: 1px dashed black; padding: 2px;"> <ul style="list-style-type: none"> ・具体的な支援、支援具についての研修 </div>				
	<div style="border: 1px dashed black; padding: 2px;"> <ul style="list-style-type: none"> ・日々の子ども理解や支援のあり方について、共通理解を図る機会 </div>				
	<div style="border: 1px dashed black; padding: 2px;"> <ul style="list-style-type: none"> ・保護者支援等についての研修 </div>				
	<ul style="list-style-type: none"> ・保育公開や巡回指導による個別支援と学級づくりに関する研修 ・個別の教育支援計画、個別の指導計画作成の研修 	<ul style="list-style-type: none"> ・一人一人の保育場面に応じた、より具体的な支援についての研修 	<ul style="list-style-type: none"> ・特別支援教育を推進させるための基本理念を学び、リーダーシップを発揮するためのスキルアップ研修 	<ul style="list-style-type: none"> ・園内委員会の持ち方を学ぶ研修 ・個別の教育支援計画、個別の個別計画作成にあたって、指導、助言できるためのスキルアップ研修 ・関係機関の取り組みを知り、情報共有できる機会 	<ul style="list-style-type: none"> ・薬物理解、服用についての研修 ・保護者支援（ペアレントトレーニングの考え方など）の研修

形式的スタイル

- ・開催時期、時間など
- ・センター的機能を有した園を中心とした研修会
- ・市幼稚園教育研究会、保育園協議会などの枠を超えて研修会を組み合わせる。
- ・中学校校区など地域ごとにおける研修

番外編

- ・自主的勉強会

(2) 園内体制の充実

子どもや保護者支援を担当や担当者が一人で抱え込んだり、外部機関に丸投げしてしまったりするのではなく、園全体としてサポートしていく力、一人一人の役割の確認が必要であると思う。管理職や特別支援教育コーディネーターを中心とした園全体の組織力のアップが重要である。

職員体制については、保育所では診断がないと保育士を加配しにくく、結果として十分な支援ができない現状があると共に、加配職員がいなければ、当然、職員負担が増えることになる。幼稚園では特別な支援に関わる職員（特別支援保育補助教諭、幼稚園ヘルパー）の勤務時間が限られているため、担任等との共通理解を図るための時間が確保できない。子どもへの十分な支援を行うために、特別な支援に関わる職員の数、勤務時間の増が必要となる。また園において普段から保護者を支える相談体制を整えていること。そうすることが、例えば障がいのある子が入園してきたとしても、その障がいに向き合い、保護者を支えることにつながっていくだろう。

(3) 外部の専門機関の活用（巡回相談チーム体制など）

保育者の資質、園全体の組織力をあげていくためには、専門機関との連携は不可欠である。保育現場は実際の保育における具体的な支援についての指導、助言を求めている。そのために教育、福祉、保健等における専門家（保健師、臨床心理士、幼稚園教諭、保育士、小中学校の教諭、通級指導教室担当者、大学教授等）で構成された巡回相談チームを結成し、幼稚園、保育園を巡回指導する形態が望まれる。そしてその支援等についての情報を共有していくことも大切である。

特別支援学校のセンター的機能や児童発達支援センターによる保育所等訪問事業などを上手く活用していく方法もある。

いずれにしても専門機関を活用する場合は、支援を丸投げするのではなく、園内委員会などで、今、園内でできることと外部に求めることを明確化しておかなくてはならない。

3. システムを動かすのは人 ～保育者としてありたい姿、思い～

特別支援教育のシステムが確立し、相談事業や支援体制に携わる人が異動しても、その対応が変わらないシステムづくりは重要である。しかしまた、そのシステムを動かしていくのは人であることから、その人である私たちが、特別支援教育に対してどんな考えをもち、障がいのある子どもがどう育ってほしいと願っているのか。その思いがシステムを動かしていく時、絶えず影響していく。

障がいがあるから生きづらいのではなく、障がいのある人と周囲の環境との関係によって生きづらさがあるか、ないかが変わってくる。とすると関わる私たちが子どもたちをどう受けとめ、どんな思いで、どんなまなざしで関わっているかがとても重要になってくる。

「できる」こと認める自分の中に、「できないこと」を疎ましく思う自分はいないか。「その子のための支援」と言いながら、実は集団がうまく回ることを考え、名ばかりの支援になっていないか。そんな保育観や、障がいや子どもに対する自分の価値観を絶えず見つめ返していかなければならないと思う。それは相手が保護者であっても同じことが言える。相手の思いや願いをどれだけ想像し、そこに自分の思いを重ね合わせることができるのか。その「まなざし」が大切であり、それが相手の心に寄り添うことだと思う。

障がいのある子どもの周りにはいる子や大人が、障がいのある子を自分たちに近づけようとするのではなく、ありのままを受け止め、その子らしく生きていくために、共に考えていこうとするような社会になるよう保育者としてすべきことを絶えず考えていきたい。

<参考文献>

- ・ 渥美義賢他（2010）「発達障害支援グランドデザイン—早期からの支援を中心に—」国立特別支援教育総合研究所紀要 第37巻
- ・ 出雲市役所健康増進課 「年中児発達相談事業報告書」2013
- ・ 鯨岡峻（2002）「<育てられる者>から<育てる者>へ」NHKブックス
- ・ 鯨岡峻（2013）「子どもの心の育ちをエピソードで描く」ミネルヴァ書房
- ・ 鯨岡峻（2012）「特別支援教育に期待すること」聴覚言語障害研究会 講演会資料
- ・ 小枝達也（2008）「5歳児健診～発達障害の診療・指導エッセンス～」診断と治療社
- ・ 国立特別支援教育総合研究所 インクルーシブ教育システム構築支援データベース
- ・ 杉山登志郎（2011）「発達障害のいま」講談社現代新書
- ・ 杉山登志郎（2008）「子どものトラウマと発達障害」発達障害研究,30(2),111-120
- ・ 田中康雄編著（2011）「発達障害は生きづらさをつくりだすのか」金子書房
- ・ 中央教育審議会（2005）「特別支援教育を推進するための制度の在り方について（答申）」
- ・ 原広治他 ナラティブ研究会「ナラティブにみつけた臨床知2～4」オリジナル
- ・ 樋口一宗（2012）「特別支援教育の現状と課題、そして日本LD学会に期待すること」LD研究,2012,21(4),439-441
- ・ 久田信行「特別支援教育の進展と発達障害児に対する支援」特別支援教育研究, MAY2013
- ・ 廣瀬由美子他（2010）「発達障害のある子どもへの早期発見・早期支援の現状と課題」国立特別支援教育総合研究所研究紀要 第37巻
- ・ 山根隆宏（2011）「高機能広汎性発達障害をもつ母親の診断告知時の感情体験と関連要因」特殊教育学研究,48(5),351-360